



五色墨

^ 5  
1244



俳諧判書

五色墨

全

新  
1244

1244

利門  
番 1244  
巻



或師の云利体の茶湯ありひく  
事と好むともかく其利の道  
うしと見は古くは流は利か  
目とくして譽ありは利体  
安く不身くく新古は目利ハ  
ありき人よりそわき道と好むと  
かろはきとくく欠摺体なり  
よ流く茶の湯は用ちると  
らきありとのありいと  
あははひのさこりしとく  
詠

後したのじ向ハ道具之點其  
商人なり誹諧しての點其色其  
その席よりしるまてこ流ハ長毛ハ  
風流をかくし点よりて目利  
せしよあはたハ幸言あるゆへや  
あうーのあうーハ所の席の  
あうーのあうーハ流  
〜ハさ〜ハさのあうー  
是甲之點其のあうー  
〜ハさ〜ハさのあうー  
あうーのあうーハさ  
ハ措は〜ハさのあうー  
新古法分別あら〜ハさ  
りは〜ハさのあうー  
此玄の〜ハさのあうー

此物あや

宝晋并其角本

前文二十五年...

右文章其角雜談集之所載而  
角沒二十五年俳道日盛但亡  
作者用心者焉或以腹藁或甜  
糟粕爭點勝負以媚當日判者  
無意耳雪月花其臨席前句未  
唯了競唱自己句以其取豫也  
粵耳子締交有年暇日慣新  
撰六帖意輪為判者加合點  
書既成無意勝負互難陳以  
相娛也角之言寔可貴焉豈非

斯道之師哉讀之者其有取  
于此

點譜

褒章<sup>二十</sup>七字<sup>十五</sup>五字<sup>十</sup>  
三字<sup>七</sup>朱長<sup>三</sup>九<sup>三</sup>白兔園宗瑞  
花君子<sup>二十五</sup>龜巢<sup>二十</sup>魚戲<sup>十五</sup>  
三字<sup>十</sup>二字<sup>七</sup>朱長<sup>三</sup>九<sup>三</sup>樽卷即蓮之  
數露印面長<sup>三</sup> 柝隣 咫尺

崑山羨玉<sup>十六</sup>三圈<sup>十五</sup>雙圈<sup>十</sup>  
一圈<sup>七</sup>朱長<sup>三</sup> 絢堂素丸  
六羨歌<sup>十</sup>南零水臨<sup>十</sup>炭<sup>七</sup>  
朱長<sup>三</sup> 鷗心亭長水

紅梅より青く横より寛く南 長水

。 朝寐しりせぬ梅を誰 蓮之

雀の子札のうらまは口明し 咫尺

茶臼の僻を挽取らるる 素瓦

ふらふらと月を出入り月見灯 之

風のうしろしと萩二十万 尺

夕暮のたのまはるる星掛 丸

七 水の刺りかたさあはす梅燈 水

花標亦ゆらりさよほ初て 尺

酒け多量終三つ物位 之

川きり瘡の毒れうのしり 丸

。かきりの小蛇は並に腐 丸

。今持入敷の御て川静 尺

。乞食と起て互抱 丸

七 伊道の遠入に月の中の家 之

。燈火の色も〜ぬ鹿挽 尺

浪人の舟唄ひて善 丸

仕り物やの羅の久言 之

十 美子の燈護院を中通り 水

。さらさらの流の急あり 丸

七 紫蘆漬の着まて歩つて 尺

。あ〜〜と出ぬる危かけ 水

小雛の大ききる草の香 之

十 正日らうと宿の日記 丸

山師来取軍と何れも 水

。は位の色をよ〜通灌 尺

くきり結つ居しおねひ 之

。身床ゆい関の言か 丸

。夕日お先想押し迫る 尺

。心ゆ憶井の流るる 水

高紀原のりつて生齋 九  
七 くらもちろるを捉て書書 之

号原のころかへを柄一かけ 水  
名代指部ハ後みくと 九

如致の里のりつて生齋 之  
参勤致遠のりつて生齋 尺

判者 宗瑞

是五鳳樓手ニ

所護沈

膳所の日事

席上珍 四

この判力 印のりつて  
常義は漬 ちろるを捉て

朱 五

ワキ 肩と紙  
かき持のりつて 物ねひ  
タリ、ぬ

長ハ  
丸ハ



三浦のくさ子まきうり 雲元 宗瑞  
 生あつちの夢のふれ口 咫尺  
 藤原村のほく及ての歌々 素丸  
 船場の歌のふれ口の歌 長水  
 有明の海流の影をまや 尺  
 三つりみんらの月をよけ 丸  
 十五のうらと頼木の落る音 水  
 ちりほきの杯も面すに 瑞  
 七 海朝の袂かき出ろの喜 丸  
 松原のふれ地を経好 水

推の園松ヶハゆりゆりさる 尺  
 舟のさしはるるを切て川の島 丸  
 七 あの葉はるるに花言のま似 水  
 うすき六張りゆり燈のなほ 尺  
 京都の舟もまきの月 尺  
 おとく女の豆腐のまの奥 水  
 うすき色男 律のまの奥 尺  
 以風の津よ離れす 船の端 尺  
 舟のまの奥 尺

鴛鴦二色にうぬ繪具四 水

たの差を大高司家 尺

賣牡丹ゆらん範のおつけぬ 尺

お産のしつはよおつたを 水

盲子のあつては怪あせす 丸

泊りち工の巫の世がう 尺

ちあらん漬と包拵ハ誰うあ 尺

繁みく茶りやくの實 丸

松男ハ破き一守あれを鼓 丸

亮よしけゆるうとれてり大 尺

7 縁の下木の股かると珠拾ふ 丸

柘字は回ハハハハハハハ 尺

ほよハ張の方てりきくは 尺

柘ちめあへすの此集は 水

。 いろや鞠さうくたの白紙音 尺

真砂よまうう海の貝屑 丸

Handwritten bleed-through text from the reverse side of the page.

判者蓮之

魚戲一

蕪柳の影

十里香二

白方二

誰のみ

青錢四

梅朝

柴のう

可きほ

竹あま

朱七

茶句

四句目

川の鳥

ゆるり

音子

りやの空

花の日

長丸

丸

薜や不判見てわろ歌り相

蓮之

七 海舟の魚の一尾の路

素丸

門の月天のわろ歌り相

長水

をまはるる旅のゆは

宗瑞

あつまふまふいへる藍の白

丸

あつまふまふいへる藍の白

水

十 古塚へ海へ隠れぬあつて

珠

何内女のよい編とよる

之

七 我そのむせのち葉子

水

十五 更り楊屋は桐の志

丸

物邊や小柄は失てほそ其  
珠

久しゆうそ流神のあつ  
水

餅芋しほし擡ぐの所おま  
之

赤魚あつて花の老氣母  
丸

○ 沖あ中こ谷こわおつる龍の  
水

はぶあつてほそ流神のあつ  
珠

令よあつてやまこし舟の目  
之

いさよあつてやまこし舟の目  
丸

○ 窓毎いさよの八王子切あつ  
珠

あつて娘のお流神のあつ  
水

麦あつて秋はあつて  
之

七 此昔あつて馬の通る着や日  
珠

あつてやりの首あつてけり  
丸

○ ち師の廊はあつて大岳  
水

七 秋見世の友はあつてやまこし舟の目  
水

祝まあつてはあつて  
丸

福舟は田舎あつて先はあつて  
之

あつてはあつてはあつて  
珠

あつてはあつてはあつて  
丸

鬼灯あつてはあつてはあつて  
之

水  
本母寺のりつあふこころ萱の刺  
びりりて捨る多所の角  
石榴のこふいささしくむ縁  
之  
之聲の毒山伏の声  
誤て定し落筆の聲所  
朝日いしくうき痛も成  
水

判者咫尺

十五吳姬菱下無一

東のあ場屋

十丈道一

古塚一

七息車四

ハキ  
七のこ草子  
御着るる  
雪の文

五鳳樓四

稚子のあ

弓師

長十二

八玉子

ふゆ

名月や歌ハ前句の人通り 咫

二尺トかりを挑打の紋 長

堀の田ハ例リ刀切の所 竊

弱暮の夕日と夕日 蓮之

索類と上より下へ水 水

鶴ノ後ハ南竹の 瑞

七<sup>タ</sup>本の香は出と痛切なわけ 尺

産りれ津子の糸は 水

七<sup>タ</sup>尺やまゝ奇しはきぬ標記 水

お内の香はすくは 水

紫陽もの香はさつ 尺

仰きこひの隠居 之

はこ流の香ゆゑに 瑞

うつもよきもの後人 尺

おかくは舞の歌ハ 水

言と歌詠して寺の 瑞

おの目り梳もむふ 之

鶺鴒抱て寄る古の 之

小<sup>ナ</sup>皇子のうきし初めて 尺

あれと解る川弁の 之

十 冬の日にあらのちりひん版之交 氷  
 七 雷鼓かけけるはの傷人 瓊  
 松の枝より房よりとるは松鳥 之  
 七 蒼麦はららのとみは月 尺  
 十五 波打りすり妙筆とありては 瑤  
 一 玉竹は鶴のまき 元ヶ 水  
 三 せせと仙へ通る冷茶碗 尺  
 雪のまきへ先年積氷 之  
 龍のたもと階子へ流る破鏡 水  
 一 鳥の羽織の気衣 尺

三 山のいと場へかき入道風 之  
 三 ぶらり藤おのふたふ玉 瓊  
 令入の吳柳は春の浮雲 尺  
 一 くらあはしよとて清かり母 水  
 一 船とく猿の盛のそりり 瓊  
 一 活生の坊居よるめ 之

判者素丸

三圍

あしき海

双圍

その日

一圍

ぬき糸

摺り紙

けの巻人

巻表

朱七

古向目 念役人 寺の巻紙

川舟の巻 仙道守り 舟の巻

ての巻

長八

辛卯の巻 坐臥の巻 朝日山 素丸

あしき海 下やき梅 宗瑞

いづれの水の巻 地巻 蓮之

七 巻の巻 巻の巻 忍尺

稲垣の巻 解の巻 瑞

あしき海 巻の巻 之

文珠巻の巻 巻の巻 尺

道之巻 巻の巻 丸

より巻の巻 谷の巻 尺

すゝの巻 巻の巻 尺



おそろい曲輪て何種で管受之

正判事の字と係り

住れそおののまごの古籠籠尺

近世とてあるけり

本丸のよちこの山の判り

本士方役のまじり

かゝその社ありしは元所

七 寺々々々々の新まじり

十 志実か友近むじり

借里あつて合はす

さかして鹿やうひの

十 蛇さくまれの寺の小個市

草葦の七日後原

七 赤ら子よあつて

酔ハせぬ破ハせぬ

障とさけハ

腹立系

りか

幸河

初海

う  
 あの牛のそとくしとせれ格の色  
 丸  
 癒うや穴の滑りもらん  
 丸  
 た雪吹看まはすことを切道  
 尺  
 滑の滑りけの滑りもき日  
 之  
 〇  
 むろの滑りもはるぬ比理ゆり  
 丸  
 ころころころころとけ菓子の條  
 滑

判者長水

南零水一

寺のつゆ市

院者水三

四の目

みよ

安中  
朱四

寸二

ひみ

おの滑

まの滑

長八

この書一紙皆そのものなり  
たゞそのつらさなり ありては  
さういふものなるは 自由  
なものなり 一二の事よりよ  
のこ自撰の心なり 世に  
さきよりさういふもの  
これよりなる作者は 世に  
いふに 海にのりて 海  
に 一 句 一 字 一 心 一 意 一 心  
越の心と云ふものなり 心  
なり 一 集 一 集 一 集 一 集

そとけ 一 集 一 集 一 集 一 集  
は 心 一 集 一 集 一 集 一 集  
つられす 死 句 一 集 一 集  
凡 一 集 一 集 一 集 一 集  
い 一 集 一 集 一 集 一 集  
い 一 集 一 集 一 集 一 集  
清 一 集 一 集 一 集 一 集

玉笥山人述

竟宴

うらみすや大倉産人より前 驚  
 柙の隈は旅人の懐 長水  
 川風より活生の胸を相対て 宝瑞  
 鮎の秋の壽 行よ 蓮之  
 酒子の古し捲るる如の月 素丸  
 ふりつゝもろて葉の先生 翠尺  
 瘡の方瓦富は丁の暖簾也 氷  
 氣より角いりけるを扱 雨  
 急歌つらきとて云事おひ 之

袖何しあすいおる飯 枳  
 涼日蓮溜りのそけも夏 尺  
 ころり一雀の晴わろる 丸  
 ぼつとる寝て吹石鱈海は 雨  
 二日三日と抱守八月 水  
 月のこつ如の一舌片指のま 陽  
 いとく心ちかよる瘡の房棚 之  
 遠草一の昔跡り地 造とを 尺  
 勝よあかきとあ名りおか 丸  
 其若元巨櫃の側 壽丸 之

天下春平穀つり死  
吹矢骨とて奴のあかた  
仰の徳と有徳高物  
比定れ右よ居ははるのゆい  
西に解廓の國よいの危  
旨くこ山の彩樹の佐玄龍  
男の琴と彈きよの向  
一枚の雞投りて降る  
黒塗押すはの打  
飛脚の足はよとてはるの  
尺 水 西 丸 招 尺 水 西 丸 招

稻妻の出子古以の山  
扇より足捨りし草 椒  
ちつよの巻や道明持  
守宮とはさるまらぬ七り海  
二喜の所恨りしり  
ゆるんを喜女伸よむの危  
身遊立一人一人以客  
尺 水 反 丸 之 招 水 尺 招

享保十六年

辛亥菊爇

彫工

下栞原同朋町

芥澤彦七

浮日本橋通二町目

書肆

戸倉屋喜兵衛

元文五庚申首夏

龜遊齋書寫

寛保二戊辰孟春

頑畦

隨寫

廣雅釋義

卷一

釋詁

廣雅釋義





